

## はじめに

絵本の読み聞かせで目指すのは、自分自身の命を愛し、他者の命を愛するという心の状態です。それは、「生きている奇跡を尊重し信頼する」という心の状態と言いかえることができます。未来を生きる子どもたちには、ぜひそうなって欲しいと思っています。絵本の読み聞かせが、なぜそのような効果を持つのでしょうか？それは、絵本の読み聞かせが、乳児に対する授乳と類似の刺激だからです。

授乳の時、赤ちゃんは母（養育者）の顔（目）を見つめます。母（養育者）も赤ちゃんの顔（目）を見つめます。この見つめ合いの刺激は、聞き手（読者）が絵本の主人公の顔を見つめる刺激と類似しているのです。また、授乳の時、母（養育者）は、語りかけます。それも高く抑揚を効かせた声（「母親語」）によってです。絵本を読む時も、この「母親語」と類似の声が出るのです。授乳ではこの視覚刺激と聴覚刺激が同時に起こります。絵本の読み聞かせでも、視覚刺激（映像）と聴覚刺激（言語）が同時であり、右脳・左脳を同時に活性化するのです。

授乳も絵本の読み聞かせも心地よい時間です。絵本の読み聞かせでも、授乳の時のように、よりそってスキンシップをはかるのが理想でしょう。また、子どもを前に集めて、子ども同士がスキンシップをはかれるようにするのも一方法です。時には、「ミルク」等を配ってなめさせておけば、授乳との類似性が高まり、絵本の読み聞かせの効果は絶大なものになります。

さて、絵本の読み聞かせの効果に対する信頼は、私自身が絵本の読み聞かせをしてもらったことにもとづいています。私が絵本の読み聞かせに出会ったのは、中学二年生の時でした。理科の時間に理科の実験室で、若い女性の先生が私達生徒を教卓の周りに集めました。そこで先生が取り出したのは『だるまちゃんとてんぐちゃん』（加古里子作・絵／1967年 福音館書店）でした。その時、「なぜ理科の時間に？」などと詮索することなく、私は絵本の読み聞かせに魅せられてしまいました。その絵本と先生の読み声は、私の心に深く刻み込まれました。今でも、私が、『だるまちゃんとてんぐちゃん』を手に取り、「こんなうちわじゃ ないんだけどな」と音読する時には、その時の先生の表情と声とが脳裏に浮かんでいます。人は人からしてもらったことを、無意識のうちに人にしているものなのでしょう。そこに人間の可能性も危険性もひそんでいます。とにかく、絵本の読み聞かせとは、幼児だけではなく、中学生にもそれほど鮮烈な印象を与えるものなのです。『だるまちゃんとてんぐちゃん』が絵と物語とで描き出す、大人が子どもの欲求を肯定してくれる世界、友達が自分を認めてくれる世界、それは、中学生にこそ必要なものだったのかも知れません。

ただし、絵本を読み聞かせた後、「面白かった？」とか「どこが心に残りましたか？」などと、感想を求めてはいけません。「主人公の行動をどう思いますか？」とか「あなたならどうしましたか？」などはもつてのほかでしょう。絵本を読み聞かせた後、一度でも感想

を求めたり質問したりすると、それが記憶に残り、次の絵本の読み聞かせを心から楽しめなくなります。せっかくの絵本の読み聞かせが、子どもの心の深くに届かなくなるのです。

「読みっぱなし」に徹することが肝要です。

絵本とその読み聞かせによって、ことばと大人に対する興味と信頼とを回復し強化することができれば、子どもを健全に成長させる道が開けると確信しています。みなさんも絵本を読んで、その万能とも言える効果をぜひ体験してください。

本書では、絵本の読み聞かせに、なぜそのような万能とも言える効果があるのかについて、絵本の仕掛けと読み聞かせの効果の両面から、そのひみつを考えていきます。

余郷裕次『絵本のひみつ』徳島新聞社

2010年7月29日初版発行